

あたりまえ

河村 治夫

最近、子どもの心身のゆがみについてマスコミでもよくとりあげられるようになった。「学級崩壊」なるものの状況をテレビで見ていると驚いた。それは小学校一年生の姿だった。今までは「学級崩壊」の学級授業の姿が存在しなくなった。いったいなぜということになるのだが、風が吹けば桶屋がもうかる式に、その原因として世の中の不景気が結びついてくるなどその見方はさまざまである。

今から約三十年前、デザイン科（工業デザイン

ン）学生だった私は乳幼児がかかわるモノ、特に保育園、幼稚園内のモノづくりに興味をもった。学校卒業後、三年程弱電メーカーでの企業デザイナーの時期もあったが、やはり乳幼児がかかわる「モノ」へのこだわりから男性保育者（保育士）になり、保育園という空間を自分で直接知ってみるしかなかった。五年半というわずかな期間の後今の工房で主に保育園のモノをつくり続けているが、一言でいえば、乳幼児にとって「あたりまえの保育とは」「あたりまえのモノとは」を現場と

かわりながら探り続けてきたつもりである。こうして「保育」にかかわるはしくれとして、最近の子どもの変化がやはり気にかかる。

私は今のところまだ持ちあわせていないが、そうもいかなくなるだろうと覚悟しているものがある。今やもうあたりまえになりつつある携帯電話である。今や文明の利器は数あれどこれは日常生活用品としてSF的な、夢のような感じがする一品で、夢の超特急といわれた新幹線は単にスピードの面で相対的な驚きだったし、テレビにしてもその仕組みはともかくとして電気紙芝居という意味での驚きだった。しかし、月に人が立つことや、火を使わずして調理ができること、そして、いつでもどこでもどんなに離れていてもだれとでも連絡がとりあえることとなると、今までのあたりまえが反転してしまうという違った質の驚きとなる。

携帯電話が存在しなかった過去の日常生活の中でどれだけのドラマが生まれたことだろうか、それら多くは悲しみに通じること故に携帯電話に至ったのだろうが、あの有名なドラマ「君の名は」にみられるような男女のすれちがいはいもう小説の材料としては使えない。

乳幼児はほんの五、六年の間にさまざまあたりまえのことを学習していく時期だともいえる。少し前までは、離れたところからテレビのスイッチは入れられない。包丁がなければ料理ができない。手紙はそれ自身が移動して届くもの。水道の蛇口は手でひねる。等々どれもごくあたりまえのことだった。それが今やあたりまえではなくなった。これらあたりまえのことは、いうなれば人として生きていく上での基本である。この基本が乳幼児期にしっかりと学習されることになる。こんなことは少し前まで大人が特別意識しておく必要はな

かったが、今やそうではない時代になったということである。

ある程度「基本」を学習済みの現代の大人は文明の利器をそれとして生活の中にとり入れてもいいかもしれないが、今後の子どもは基本が身につつかぬままということになり、その先がぐらつくのではと心配になるのはこれまたあたりまえである。もはや家庭内環境だけで乳幼児に「基本」を学習させるのはむずかしい。大人は意識的にその場を用意しなければいけなくなってきた。その役をしっかりと担うのが乳幼児専用生活空間たる保育園、幼稚園ということになる。

最近「ビオトープ教育入門」(山田辰美編著、農文協)という本に出会った。「ビオトープ」とは生物相によって特徴づけられる野生生物の生息環境というほどの意味、と記されている。この本の最初に「学校ビオトープの発展を願って」と題

して杉山恵一さんが一文を載せられている。読んでいてあまりにも説得力があると感じたのでここにその一部を引用させていただきたい。

「個体発生は系統発生を繰り返す、という生物学上の定説があるが、心身の発達においてもそれに似たことが言えるのではないだろうか。つまり、子ども時代のある時期までに、われわれは原始・未開の時代をシンボリックに経験するのである。その後の文明の時代に適応するための学校教育があると考えてよい。小学校の低学年は、その引き継ぎの時期に当たると考えられる。

この原始・未開の段階での経験は、自然の裡で任意に行なわれ、さまざま能力が自得されるべきものである。哺乳類や鳥類の幼い時期の生活ぶりを眺めると、無邪気な遊びのなかで将来の能力が育てられていることを知ることができる。人類といえども、永い生物の歴史の末端に出現したも

のであるから、現在でも同様な条件を備えているものと考えられる。」

この本の中では学校だけではなく、保育園、幼稚園ビオトープの実践も紹介されている。

引用文の中の「子ども時代のある時期までにわれわれは原始・未開の時代をシンボリックに経験する……」の表現は、まさに「モノ」に対してもあてはまることだと私は思っている。動物の中で唯一道具を使う人間として、乳幼児期にはシンボリックなモノ、あたりまえのモノにしつかりかわっておく必要があるということになってくる。

あたりまえのモノとは何なのか、いろいろなとらえ方があるが、モノと接する時「カゲン」が必要であるモノという言い方ができる。例えば鼻水が出て鼻をかもうとする時、チリ紙の束からチリ紙を必要量のみとると、今やあたりまえになったティッシュペーパーボックスからとるのを比べてみればわかる。後者は何のカゲンも必要な

い。こうして見ていけばきりが無い。直接手にする道具ではないが、時を示す時計について考えた場合、本来「時」というアナログなことを表現するあたりまえのモノは、数字のみの変化であるところのデジタル時計よりも、長短二本の針が動くアナログ時計があたりまえとなり、シンボリックなものならば砂時計となる。仕事上いろいろな保育室を見る機会が多いが、さすがに大きなデジタル時計ではなく、「コチコチコチン……」の歌にもあてはまるアナログ時計が壁に掛けられていたり、よりシンボリックな鳩時計をみかけることも多い。

シンボリックといえば、モノの形さえも今やそれぞれの特徴がむやみになくなりつつある。少し前まで、郵便ポスト、まな板、牛乳ビン等々それなりの形があつたが、どれもこれも直方体へと落ちつきたがつているようである。

乳幼児と昨今の「モノ」との関係が、子どもの

心身のゆがみに通じていると言いきる確信はないが、保育園、幼稚園はなんといつても乳幼児にとつての生活の場であることにはまちがいない。そこでの日常生活用品のあり方は保育そのものとのつながりから今まで以上に注意深く考えなければいけないはずである。そんな中で、最近『保育

園のええもん』という本に考え方をまとめてみたが、つくり手側からのみではどうにもならず、「ええもん」（いい物）は今後も保育の中でそれらを使いこなす現場とのプロジェクトチームの中でつくりつづけていくしかないと思っている。

（かて工房）

開発途上国での想いを帰国後も

協力隊幼児教育ネットワークの活動

前田美知子

青年海外協力隊の幼児教育隊員派遣

アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・

東欧の開発途上国の中に、幼児教育の歩みが少しずつ進んでいます。これらの国に青年海外協力隊の幼稚園教諭隊員・保育士隊員の派遣は二十年の